

獣医さんのお仕事 in異世界3

蒼空チョコ Choco Aozora



アルファボリス文庫

オーヴィル
賊軍「モータル
パレード」と呼ばれる
犯罪集団の頭領。
危険な雰囲気の大男。

ウィルバー
賊軍「モータルパレード」
の一員。一見、人の
よさそうな好青年。

クイナ
隷属騎士団の団員。
風見に複雑な感情を抱く
ウェアキャットの少女。

クロエ
ハドリア教の神官にして、
風見の付き人。
清純で勤勉な乙女だが、
信仰心が強すぎて、
時々ナナメ上の言動をする。

クライス
アウストラ帝国皇太子
ユーリスの執事……に
見せかけた、皇族特務騎士。
無表情で、
あまり感情を見せない。

タマ
風見が仲間にした、
アースドラゴン。

グリ
風見が引き取った、
グリフォンの子ども。

リズ
奴隷によって構成される
戦闘集団「隷属騎士団」
の元団長。
ニヤリ笑いがよく似合う、
ウェアウルフの少女。

風見心悟
ラノベやアニメを嗜む、
公務員獣医さん。
ひょんなことから異世界に
召喚され、その世界に
生きるもの達を救うべく奮闘中。

グラ
風見が引き取った、
毛玉ウサギの子ども。

Main
**主な
登場人物**
Characters

プロローグ

風見心悟がムラメントの町で火鼠狩りを終え、その賞金でリズを買い取ってから数日が経過した。

事件もない穏やかな日常の中、面倒事と言えば、そろそろ帝都に戻ってこいと、アウストラ帝国皇太子のユーリスが催促のハトを飛ばしてくることくらいである。

だが、当の風見はすぐに帰るつもりはさらさらなかった。帝都に戻る前に、竜の巣と呼ばれる火山地帯にある遺跡洞窟を訪れる予定でいる。

そもそも、風見は帝都に腰を落着ける気はない。

というのも、帝都は国の心臓部であり、末端から豊かさを吸い上げている場所だからだ。加えて、風見たちが滞在するラヴァン領は帝国の畜産と農業の中心地であり、獣医である風見の技術を活かすのにお誂え向きなのである。なら、どちらに助力すべきか明白だろう。

そんなわけで、帝都には顔を見せに行くのみだ。風見が旅の前準備としておこなって

いるのも、留守の間にこの地で進めてもらう仕事のマニユアル作りである。

その仕上げとして、彼は実用試験の真つ最中なのだが――

「ようやく軟禁生活が終わったと思ったら、まーた部屋にこもって何をしている?」

椅子の背にもたれかかったリズに、白い目を向けられる。

本日の風見は半ば実験室と化した自室の片隅でタライの前に座り込み、何かを揉み洗いでいた。それはもちろん衣服の類ではなく、動物的な生(なま)の何かだ。怪(あや)しいことこの上ない。

「手術用の縫合糸(ほうごうし)を作っているところです」

「……そんなもので?」

「こんなもので」

ざばーっとタライから引き上げたのは腸の薄皮――正確には羊の小腸表面の薄皮を剥(は)いたものだ。

それを見たリズは、ますます胡散臭(うさんくさ)そうに目を細める。

「理解(りかい)できんね。それがどうやって糸になる?」

風見の手にある小腸漿膜(しょうちようまく)は言(い)ってみれば半透明のラップのようなものだ。どこから見ても糸には見えない。

「まず、灰を溶(と)かした水で洗(せん)って、漿膜(しょうちようまく)から脂肪(しよつぷ)を抜(ぬ)く。そうして、漿膜(しょうちようまく)が固(かた)くなっ

たら均(ひら)一(いつ)に引き伸ばして糸にするんだ。あとは二酸化硫黄(にさんかいおう)とかのガスで防腐処理をすればほぼ完成。それをカットグット(グット)って言(い)ってな、弓(ゆ)や楽器(がく)の弦(しん)になるくらい強度(きやうど)があるし日持ちもするんだぞ?」

「私はそんなスジっぽそうなものより、腸の肉詰(にくじめ)めの方が好きだね」

「ホルモン(ホルモン)のみそ炒(め)めとか、もつ鍋(なべ)もいいな。メ(しめ)にうどんを入れるとなおいいと思う」

「うどん?」
リズは相変(あひ)わらず異世界の医療(いりよう)には興味(きょうみ)がないらしい。興味を持つものといえ、食べ物と武術(ぶじゆつ)の話題(わだかま)くらいだ。作品(さくしん)に興味(きょうみ)を持(も)ってもらえない風見(ふうみ)としては複雑(ふくざん)な心境(こころざし)である。

それはともかく彼(かれ)がわざわざ、こんな物(もの)を作(つく)っているのには理由(りゆう)がある。それがわかるかと問(と)いかけてみると、リズは考(かん)える素振(すぶり)すら見(み)せず(み)に肩(かた)を竦(すく)めた。

「縫(ぬ)えるならなんでも一緒(いっしょ)だろう? 手間(てま)がない分(ぶん)、そこらの糸(いと)でいいじゃないか」

「いいや。皮膚(ひふ)ならともかく、体内(たいしん)で分解(ぶんかい)できないそこらの糸(いと)で内臓(ないざう)を縫(ぬ)うのはまずいんだよ」

「……? 違い(ちが)いがわからんね」

手術(しゆじゆ)において、縫合糸(ほうごうし)を体内(たいしん)で分解(ぶんかい)できるかどうかという点(てん)は、かなり重要(じゆう)だ。

飯(い)に絹(きぬ)や綿(わた)のような吸収(きうしゆ)できない糸(いと)で腸(ちよう)を縫(ぬ)ったとする。それは言い換(か)えると、ずっ

と残る異物を体内に埋め込むということだ。マイクロレベルの花粉にも反応する体に、そんなものが残されていて影響がないわけがない。

悪ければ拒否反応で糸の周囲に炎症や壊死が起きたり、糸が通った腸管の穴から腸内細菌が腹腔に漏れて腹膜炎になる場合もある。よくても異物ごと癒痕化して腸の動きが制限されたりと後遺症を残しかねないのだ。これらの危険を防ぐために、分解吸収できる糸が不可欠なのである。

「吸収糸は俺が治療の成功率を高めるためにも必要だし、この効果が広まれば当然需要も出てくる。命に直結する医療道具が売れないはずがないんだよ。それに、武器と違っていくら広まっても悪用される恐れがない」

と、掻い摘んで説明し、目を向けてみたらどうだ。リズは椅子にもたれたまま、うとうとしているではないか。当然、話なんて聞いていなかったのだろう。

「んあ？」

「……」

今になってようやく気がついたらしく、ぼけっとした顔を上げる。作業の手を止めて、いろいろと説明してやったというのに、彼女は口の端からよだれを垂らしている始末だ。じとーっと恨みがましく見ていると、犬もとい、ウエアウルフのリズはマイペースにあくびを噛み殺し、悠長に伸びまでしてから、ようやく返答してきた。

「シンゴの話はつまらんね」

「はっ倒すぞ、お前！」

つい口を突いて出ってしまったが、それも無理ないだろう。自分で聞いておいてこれなのだ。しかも、どことなく迷惑そうに眉を寄せた顔がかなり癢に障る感じである。

さらに犬は、ほほうと頷くと挑戦的に笑んだ。

「いいよ？ 好きにすればいい。もしシンゴが私を捕まえられたら何をしてもいいさ。なんでもしてあげよう」

「言ったな、この野郎。どんなに恥ずかしい罰ゲームでも容赦はしないからな！」

キリッとしながらも、よだれを拭き忘れているバカには、一泡吹かせてやらねば気がすまない。風見はいきり立って、リズに飛びかかるのだった。

……そうして数分が経過した。

風見は年甲斐もなく頑張ったのだが、結論を言うと、ダメだった。

いくら飛びつこうとも、宙を舞う木の葉のようにひよいひよいと腕をすり抜け、捕まえられない気配もない。

「はあっはあっ。だあああっ、くそう！ もういい……！」

「なんだもう終わりか？ ほれほれ、あと一步で捕まえられるよ」

「やなことだ。終わりだ、終わり。捕まえられない気がしない」

目の前ではたばたと嬉しそうに揺れている尻尾が憎らしくて仕方なかったが、引き際は肝心である。頭を低くし、その一方で尻をうずうずと揺らして遊びに誘ってくる犬を、普通に追っても捕まえられないのと一緒に一緒だ。

「明るいうちじゃないと細かい作業ができないから後でな」

「……むう、つまらんね」

「なら、俺に構わず外にも行けばいいじゃないか」

「それもいいが、あの贅肉に会ったら面倒なんだよ。けれどシンゴの傍にいれば何事もなし、ぐぬぬとあれが菌噛みする顔も見られるからね。周囲からも清々すると好評だよ？」

そう言うてリズはケケケと笑う。おそらく贅肉とは、このラヴァン領領主ドニのことだろう。元主人だというのに、彼女はとても悪い顔をしている。

「それに他の護衛が今は別の仕事でシンゴの傍にいないんだから仕方がない。一応、シンゴは私が護衛すべきご主人様だから、私は忠犬らしくここにいろしかなんだよ。健気だろう？ 褒めていいよ」

リズはそう言うてカットグットの材料を束ねていたロープを輪にして自分の首に通し、リードのように一端を差し出してくる。

これを引っ張れば捕まえられるかもと一瞬考えたが、風見はやはりそれを放置するこ

とにした。これはきつと釣りなのだ。引っかかってやるのは癪である。

風見はカットグットを灰汁につける作業を終わらせ、机に積まれた羊皮紙の束へ目を向けた。

すると残念そうに耳と尾を萎れさせたリズは、ロープを後ろへ放って捨てる。

「それは？」

「教会簿の写しだよ。ハイドラの大まかな人口と、死亡者の死因がわかる範囲で書いてある」

「死に方なんてどれもたいして変わらんだろうに。そんなのを調べる意味なんてあるのか？」

「あるさ。死因がわかっていれば、その対策をすることで死亡率は減らせる。俺が何をすれば人を助けられるのか、その答えが書いてあるんだ。調べなきゃ始まんない」

人口は二万人程度だが、これでも数少ない大都市らしい。現代日本とは大違いとはいえ、中世ヨーロッパの都市人口もこの程度だったそう。そして死因は低所得国の主な死因と同じく、風邪をこじらせた気管支炎や肺炎、流行病として思っ下痢や結核などだそう。衛生観念がほとんどないこちらでは細菌や寄生虫が猛威を振るうのだろう。

「リズはこの国の現状——誰がどんな理由で、どのくらい死んでいるか知っているか？」

「私は調べたことなんてないし詳しくは知らんよ。けれど食い物がなくて餓死したり、

弱ったところで風邪を引いてあつけなく死んだりするのはよく見るね。あとはそうだね……冬なら家のない人間が凍死することはちらほらある。刀傷や魔物が原因で死ぬのは稀まれかな」

「そうだな。まずは子供や老人、弱った人から死ぬ。新生児なんて四人に一人が産まれて一年以内に死んでる。だから、ハイドラの人口はここ数十年変わってない。人口の大半は子供を作る四十歳以下が占めているにもかかわらずだぞ？ それもこれも、ちゃんとしたご飯と、正しい治療法がないからなんだ。だから俺は、それを改善しよう、こうしていろいろやっているわけだ」

「シンゴ、それはおかしいよ。食い物がなくて人が死んでいるのに、病気だけ治したところで餓死や衰弱死を増やすだけだろう？」

「うん、それは人間だけを治療すればな。けど思い出してほしい。俺の本業は獣医さんだ」
難しい顔をしているリズに、頷うなづき、風見は席を離れた。彼が向かったのは窓際である。

陽が当たる場所にクッションが置かれており、その上ではグリとグラが丸くなっていた。
「はい。取り出としたるは可愛い動物です」

「かわいい……？」

風見が持ってきたそれは人に慣れず、きしゃーっ！ と牙を剥むくグリフォンと毛玉ウサギだ。「可愛い」という言葉にはどうしても違和感がある。

「人は飢えと感染症がヤバイ。じゃあ、動物たちの衛生や健康状況はどうでしょう？」

「動物なんて糞と泥まみれでも平然としてるんだから、気にすることないだろう？」

「いいや、気付かないだけで人と同じ状況なんだよ。だって魔物はともかく、一般の動物なら体の構造は人とはほぼ同じ。風邪も下痢けりも患わづうんだ。畜舎で密集して飼われるから、むしろ人よりも死亡率が高いこともある。じゃあ、医療が充実してそういう動物も助けられたらどうだ？ 農耕用の牛馬はもっと活躍できるし、酪農製品も増える。肉ももっと安く、多く出回るよな」

今風見がしているのは、そういう好循環のための下準備なのだと締めくくり、二匹をクッションに戻した。

「スケールの大きな話だね。私には想像しきれんよ」

「俺もだ。ただだけ変わるんだろうなあ。そういうのを想像したり、実際に見たりするのが楽しみで難しい研究をするんだよ」

実に楽しそうに語りながら風見は椅子に座る。その身振り手振りや表情は、まるで将来の夢を語る少年だ。

リズはそんな彼を見ながら、先ほどのように椅子の背にもたれて座った。話の内容はほぼ右から左へ聞き流しているが、彼女の尻尾しっぽはぱたりと穏やかに揺れている。

「そのための第一歩として、衛生環境の改善を進めてもらう予定だ。人も動物もまずは

感染症にかからない環境を作ることが重要だからな。消毒なら純度の高い酒と熱湯と消石灰で事足りるから、教会に周知してもらおう。その次の段階としては薬作りだな。肺炎みたいな治りにくい病気を治せる抗生物質ができれば死亡率は今の三分の一以下にできると思う」

「三分の1か。この医者にとつては嘘みたいな話なんだろうね」

「そりゃそうだ。不治の病^{やまい}って言われるものを治せる薬だぞ？ 喉^{のど}から手が出るほど欲しい人がたくさんいるさ。それを売って資金^{かね}が得られれば、もつといるんなことができればいい。リズ、街も国も変わっていくのはこれからだよ」

風見は興奮気味にそう宣言した。するとリズは、ふふっと笑う。

「変わっていく、ねえ。で、シンゴはその嘘みたいな薬をどうやって用意する？」

風見はふむと考えながら自分の中で算段をする。

抗生物質なら微生物を培養し、ペニシリンのように発見すればいい。ただし、今まで発見された抗生物質は数万はあるが、実用化されているのはたったの百種程度と言われている。使えるものを発見するまでが至難の業^{わざ}だ。

「抗生物質はとことん微生物を捕まえて培養するしかないな。虫下^{むしだ}しならある程度目星はついているんだけど、こっちにもあるとは限らないし、まずは民間療法で今まで使われてきた薬の話から調べていった方が早そうだ」

「病気はまだわかるが、たかが寄生虫ごときに人が殺されるものかな。信じられんよ」

「どんな小さなものでも重度感染なら宿主を殺す。寄生虫ごときと甘く見るな」

「血だの、カビだの、どこの何が出したかもわからん野糞だの、よくそんなものと生真面目に向き合えるね。紛^{まじ}うことなき変人だ。勝手にやっているといい」

「ほっとけ。獣医なんてどうせ変人の集まりだよっ！ けどな、俺の世界で何億、何十億もの命を救ってるのは、カビマニアが作った薬なんだからな。変人を舐^なめるなよっ!？」

この変人めと、けたけた笑っているリズに風見は開き直った。

何事も突き詰めていくと一般からかけ離れてしまうのだ。そういう研究者の好奇心や探求心が、一般の人に「変人」と称されるのは仕方のないことだろう。

「そもそも、寄生虫なんぞが体調不良の元と言われても、目に見えん時点で私にとつては風邪と一緒だよ。寄生虫といえば腹の中にいるミミズみたいなものとし知らん」

「それは蠕虫^{ぜんちゅう}。消化管につくタイプは害が少ないけど、重度に感染すると血管から他の臓器^{ぞうき}に迷入^{めいりゅう}することもあるんだよ。俺の世界では、発展途上国なら七、八割の人が何かしらの寄生虫に感染していたらしいから、ここでもそのくらいの割合で感染してると思う」

「七、八割ね。ふむ。それはつまり、私にも……?」

「あー……」

確率的に言えば十分あり得るが、面と向かつては言いにくくて風見は言葉を濁す。だが、リズはそれを察せないほど鈍くはなかった。不安そうな面持ちで腹をさすっている。

「ところでね。それは、その……どうやって調べる？」

リズは風見が最も困る質問を突きつけてきた。

（それを聞くなーっ！）

セロハンを使った蟻虫検査やら、糞便検査が浮かんだが、ああいうのは第三者だからこそ、お互い気にせずにできるのだ。面と向かつて、しかも少女に対してそれを説明するなんていろいろとマズイ。社会的にマズイ。

子供ってどうやって作るの？ と子供に聞かれた時のように風見はたらたらと脂汗を流す。

「う、うーん……犬なら瓜実条虫とか回虫が昔はいたらしいな。糞にうどんとか素麺みたいなのが混じってたりする。それを取って調べたり、ええーと、あとはもっと小さな別の寄生虫だと、糞を水に溶かして顕微鏡で確かめる……かな。こっちだとそれ以外の方法は無理だ……と思う」

「うん。まあ、なんとなく理解はできたよ。なるほどね。そうやって調べるわけか」

静かに頷いた彼女はしばし目を閉じ、平静を取り戻そうとしていた。

その姿は、さながら判決を考える裁判官のようだ。風見はびくびくとしながら様子を窺っていた。

彼女はたつぷり三十秒ほど静止してから、目を開いた。その面持ちにはあまり優れない。「まあ、ね……私だって奴隷だ。脱げと言われれば脱ぐし、股を開けと言われたらそうするよ。道具の管理も主の仕事だ。シンゴが求めるなら別に拒まんさ。たとえそれが寄生虫の検査でも」

「いやっ、リズは健康に見えるし、すぐにどうこうなるってわけじゃないと思うからなっ!? というかそういうのは性別に合わせて担当してもらって、また追々にだな——」
「ただ、脱ぐのとはまた違った抵抗感があるね。正直、今までこんな心境になったことはない」

「俺の言葉を聞いて!？」

彼女は物思いのあまり、言葉が耳に入らないようだ。どこか居心地が悪そうに、身を抱いている。風見を見る視線もいつものジト目とは絶対的に違っていった。

「いいか、ちょっと待てっ。いつの間に俺が調べることになってるんだ!? 犬だからっ! 俺が言ったのはペットの犬の話だからっ!」

「私も犬。奴隷だし、家畜みたいなものだよ。もちろんシンゴも医療目的で、相手を心

配して言ってくれたんだろうさ。けれどね……」
 「そうっ、変なことなんて微塵も考えてない！ わかってくれるなら助かる。俺もこれからはそういうのに配慮した取り組みを——」

「だがこれだけは言わせてほしい。——変態め」

珍しく普通の女の子のようにほそつと言いい残し、リズは部屋から出て行ってしまった。
 「……………わかってないじゃないか」

後を追うなど背で強く語っていたので、誤解を訂正しに行くわけにもいかない。

「うう。どんな病気でも、舐めるのはよくないから……。本当のことを、正直に言っただけで……」

判決が胸に深く突き刺さった風見はその場にくずおれ、かなりの時を項垂れて過ごした。

寄生虫検査をすることで死の危険から守られるのだから、決して悪いことではないのだ。……誤解や偏見を受けやすいだけだ。

「はあ。タマのところに行こう……」

実験にひと通り区切りがついた風見は腕時計を見、もう少しばかりへこんでから出発するのだった。

第一章 変人は世界を救います

隷属騎士の仕事は、領主を守りその敵を排除することだ。

現在はリズをはじめとした十人ほどが狽下と呼ばれる風見付きとなったが、守るものが領主から風見に代わっただけでやることに変化はない。

「グレン殿、お茶を淹れますので、ひと息つかれては？」

席を立ったクライスに、その声をかけられる。

「かたじけない」

兵舎で書類の整理をざっと終えたグレンは、眉間に深く刻まれていた皺を揉み解す。湯を注がれて踊る茶葉はハーブティーらしく、鼻をくすぐった香りだけでも心が安らいだ。

彼、グレン＝フォード・サーヴィイは、現在事務作業中である。というのも、マレビット——異世界から召喚された存在である風見が行動すれば、必ず何かしらのフォローが必要となるからだ。

異世界の知識で彼が活躍するのはいいが、それに乗っかって悪事を働く者や、逆に目

くじらを立てる者が必ず出てくる。

例えば、グール予防の特効薬があると偽の薬を売っていた商人や、火鼠退治に来ていた賞金稼ぎなどだ。もともと、後者はグレンが対応するまでもなく風見が解決してしまっただが。

リズやクロエといった風見の身辺警護をする者も大事だが、こういった逆恨みも含めた外敵排除をする縁の下の方持ちがいなければ、げいか 狎下の活躍は成り立たないのだ。

本来、外敵排除に必要な情報の統括は一番権力が上の者——元団長であり、今もグレンの上役であるリズがするはずである。

だが、彼女は字があまり書けないのだ。隷属騎士の副団長にグレンが抜擢されたのは、かつて騎士だったのなら事務作業をこなせるだろうという思惑もあつてのことだった。

「ワシはともかく、クライス殿はこのような事務仕事ばかりでよろしいのですかな。皇族特務という肩書きなら、このような仕事は下々に任せ、げいか 狎下のお傍にいろのが普通ですぞ？」

「身辺警護であればワタクシが出しゃばる必要はありません。げいか 狎下を引き立てることを第一に考えれば、彼女らには華があり、ワタクシはこちらの事情に精通しているのですから、これが最善の配置でございましょう」

「そう言っていたけるとありがたい。さすがにこの量を一人でこなすのは骨ですか

らな」

お茶を淹れたクライスは再び席に着き、資料の確認を再開する。彼がおこなうのは主に帝国の皇太子ユーリスをはじめとした国との調整や対策である。

対してグレンがおこなっているのは、ハイドラの隷属騎士や民衆に関することだ。しかも彼は、リズの後任の新団長がするはずの事務仕事もおこなっている。これは諸事情に加え、不慣れな新団長を慮って代わりに引き受けた仕事である。

だが、倍増した書類を積み上げてみると、さすがの彼も引き受けすぎた感が否めなかったようだ。肩や目頭に蓄積する疲労まで、ずっと追加された気がしてしまう。

「いかん、いかん。気を引き締めんと間違いをしかねんな」

グレンはそう言って顔をバンバンと叩く。

これから風見を狙う輩への対応を決めるのだ。些細なミスも許されない。

山と積まれた書類には、成功を重ねる風見を掠め取ろうとする、他の領主や有力者の情報もある。国内にも敵がいるというのは悩ましい限りだが、最も警戒すべきはやはり他国だ。

このラヴァン領に接し、日頃から争っている東国のエンルスが最大の敵と考えていた。しかし、それとは違う報告に、グレンは顎を揉んだ。

「西の人間……賊軍の頭領オーヴィルを含め、手練が何人か入り込んで来ていること。

それに西の情勢の変化も鑑^{かん}みるに、やはりそういう結論に至りそうですね」

「ええ、彼の国にもマレビトがいるのかと。価値を知るが故に欲^{ゆえ}するのでしょう。元はと言えば、あちらへの対抗手段としての召喚とユース様もおっしゃられていたので、さほど驚くことではございません」

刺客の排除にはよく釣^つりを使う。

つい先日、風見らは竜の巢へ向かったと、周囲に思わせるためのダミーを送り出したところであった。メンバーは、隷属騎士のライをはじめとした数人である。

こうした偽情報で釣れる輩^{やから}を捕らえるのだが、案外、これによくかかる。

理由は逆の立場で考えればよくわかる。

確保を命じられたターゲットはよく外出し、一人になる機会も多いらしく実に都合がいい。

だが、実際に追跡するとどうだ。奴はドラゴンに跨^{また}って外出するではないか。しかもそれは馬より速い上に、地形を無視して移動するので後すら追えない。こうなったら先回りしないと情報を集めれば隷属騎士の警戒網にかかるし、偽情報ばかり。こんなのお手上げである。

結果、あえなく警戒網や疑似餌^{ぎじえ}で釣り上げられ、こうして報告書に載るわけだ。

「東にいつまでも手を焼いているわけにもいかず、国力増強にだけかまけているわけに

もいかない。さらに、いずれは西の相手とは。面倒なことこの上ないですな」

「仕方のないことでしょう。しかし、事は単純。国同士の諍^{いなか}いは国の仕事。狎^{げい}下の仕事は国力の増強。そして我らの仕事は狎^{げい}下が自由に動ける環境作りでございます」

「そうですね。直接的な害悪は無論のこと、狎^{げい}下殿の安全を考えればやはり国境の備えも疎^{おそ}かにはできない。だが元より少ない戦力の中、狎^{げい}下の僕^{しも}としてワシらが抜けた穴がある」

そう言ったグレンは、刺客の報告書の上に本来なら新団長が扱う仕事書類を重ねる。

国境線の防衛も隷属騎士に任されている仕事の一つだ。

だが、散発的に送られる刺客とはまるで規模が違うこちらは、おいそれとどうにかできる問題ではない。

その対処にグレンが取りかかろうとしたちょうどその時、ノックもなしに誰かが入室してきた。こんな風に入ってくる人物は一人しかいない。

「グレン、調子はどうかな？」

「おお、これは団長殿。普段通りの仕事なら滞^{とど}りなく進めておりますよ」

「だから私はもう団長じゃないと言ってるだろう？　いつまで昔を引きずるつもりだ。まったく、騎士団といい、グレンといい、今までと同じ気分だといずれ痛い目を見るよ？」

「いやはや、手厳しい。しかしワシにとって団長殿はずっと団長殿だったので、まだし

ばらくは直すのに苦勞しそうです」

グレンは「もう若くないので」とつけ足して笑った。

けれど鍛え上げた現役の体をして言うことではない。誰もが、老いたところなんてどこにあるのかと、疑問に思うだろう。リズはジト目でその矛盾を指摘する。

グレンにはむしろその眼差しは心地よかった。娘を持つ父親とはこんな心地かと浸れる気分であり、同時に尊敬する戦友に小突かれた気分でもある。

「で、今は何の書類と睨み合っていた？」

「バルツイ砦での国境線防衛で、戦力をどう融通し合うかについて、あちらの隷属騎士団長と。政情不安も人死にも、狓下殿が気にしそうですからな」

「それか。まあ、以前から悩みの種だったしね。人を送った傍から次々死なれるんだから、堪ったもんじゃない。先陣なんて役立たずの正規騎士にやらせればいいのに」

「今はそれに加え、有事の際は前線で戦ってくれた団長殿も狓下付きになっておってありませんし、設備の劣悪さなども含め改善すべき点が山積みですな」

それぞれについてまとめられた報告書を、でんでんでんと積んでいくグレン。

その分厚さは、活字慣れしていないリズからすると眩暈を覚えるほどである。本当に確認しているのか疑ってしまうのだが、グレンはそれを生真面目にこなす男であった。見かけにはそぐわないが、文武両道とはまさにこの男のことを言うのだろう。

「しかし我らが抜けてから好転したことが一つあります」

「好転？ 悪化じゃなく？」

リズはにわかには信じられないという顔をする。

するとグレンは壁に立てかけてあった人の胸ぐらいの高さがある木箱を手に取り、机に置いた。

「これからの旅用にと、狓下が注文された弓なのですが、これがまた恐ろしい出来でしてな。普通の弓と変わらない軽い引きなのに、威力と飛距離はロングボウ並みと職人のドワーフが言っておりまして。もしこれを量産できれば国境線の防備は随分と強化されましょう」

「なんでまたエルフじゃなくてドワーフが？ しかもこの大きさとロングボウと同じ威力を？」

人間同士が斬り合うしかない戦争において、遠距離武器は一方的に相手を攻撃できる最高の武器だ。中でも最も活躍するのがロングボウなのだが、この武器には重大な欠点がある。

それは使い手を選ぶことだ。

ロングボウとは人の背丈ほどもある長弓で、百五十メートルから二百七十メートルぐらいが殺傷範囲だが、それを引くには四十五キロから七十キロの力を必要とする。二十

キロの引き重量もともに扱えなかった新兵が、筋肉で膨らみきった上半身となり、重すぎる弦を引き続けて指が曲がるほど過酷な訓練を経て、ようやくロングボウの射手になれるのだ。

そんなロングボウと、この普通サイズの弓が肩を並べるなんてあり得るだろうか？

リズが疑わしげな声を出すと、グレンはまあまあと宥めながら木箱の蓋を開けた。

「実際にご覧になった方が早い。ワシらが用いている弓とは似て非なるものですから」中に納められていた弓は、リズらの常識で言う弓とはかけ離れていた。

簡単に言えば、弓はよくしなる枝に弦を張ったものだ。どんな弓も、基本の形は変わらない。

しかし、これは違う。

持ち手の部分はしっかりとした金属で、その上下にしなる枝がついているという変わった弓なのだ。さらに弓の上下、しなる枝の先には何故か滑車がつけられている。弦はこの滑車にかけられているらしい。弓と呼ぶにはカラクリじみでいて異様だった。

本来、弓作りといえばエルフが専門なのだが、こんな仕掛けを施す必要があったためにドワーフが請け負ったのだろう。こういう細工は彼らの領分だ。

リズが試しに弦を引いてみると、多少きつくはあるが引けないことはない。それを目で確認したグレンは、言葉を続けた。

「なんでも、この滑車を用いることによって、重い弦を半分程度の力で引けるのだとか。名を、コンパウンドボウと言うそうです。東国の侵攻を抑えて猊下殿の心労を減らしたいと考えていたのですが、それを解決するのもあの方の知識とは、ワシらの立つ瀬がない」まあね。けれど使えるものなら使っておけばいい。この弓なら、今まで死体運びしかできなかった女子供でも持てるし、やむなく弓を持っていた男は剣や槍を持てる。死人が減るんならシンゴだって喜ぶと思うよ」

「そうですね。そういうことにいたしましょう」

全くもって彼には頭が上がらないとグレンは苦笑する。と、彼は思い出したように手を叩いた。

「おお、せっかくなので、団長殿からこれを猊下殿に届けていただけませんか？」

「まあ、それは構わないけど……」

グレンから弓の入った木箱を受け取りはしたものの、リズは語尾を濁した。

その顔から、グレンは、ははあと表情を緩める。またいつもの痴話喧嘩だろうとその情景を思い浮かべたのか、彼の表情は一層緩んでいった。

その我が子を見るような視線が、リズとしては無性にむず痒い。

変人に振り回されているのを、にまにまで見られているのだから不快にもなる。次第にバカにされているように思えてきたリズは、腕を組んで彼を睨み返した。

「グレン、気色悪い。私を見てニヤニヤするな」

「いやはや、それは申し訳ない。領主殿に断罪された時はどうなることかと思いましたが、团长殿がこうしてご無事でいて何よりと思ひましてな。ワシとしてはそれが嬉しいのです」

「やつぱりお前は年だね。そうやって話が飛ぶのは年寄りの証拠だよ」

「はは、年を取るのもいいものですぞ。老眼にはなりますが、代わりに見えてくるものもある。変化の渦中にいる团长殿を、傍で見続けられるのはいいものです。実に副官冥利に尽きる」

わけのわからないことをまた言い出すグレンに、リズの犬耳はイライラを示してぴりぴりと力が入った様子だった。

与えられる仕事をこなすだけだった獵犬が、今やこんなにも感情豊かだ。本人は気付いてないかもしれないが、風見の傍らで彼女はいろいろな経験を積んでいる。それがどういう変化をもたらしているのか、グレンにはよく見えた。

だからこそ、彼はほつこりと微笑む。「笑うな」と指で額を弾かれても、「申し訳ない」と言いながら表情は緩んだままだった。

「おお、それはそうともう一つ」

「またロクでもないことだったら帰るよ？」

「部屋におられなかったのでしょうか？ お探しの猊下殿ならばあそこに」

グレンは窓の外を指差す。

そこから見える景色の向こう。このハイドラの街に隣接する湖の対岸に巨大な生物がいた。

それは鉾物のような重厚な外皮を持つアースドラゴンだ。四十メートルは下らない巨大さのせいで湖一つを隔ててもその姿がはっきりと見える。

アースドラゴンは湖にせり出した丘に登ると、水面に飛び込んだ。予想通り猛烈な波と飛沫が発生して、漁民はちよつとした迷惑をこうむりそうだ。

そしてドラゴンはその重い体のせいで浮き上がれず、そのまま潜水する——かと思いきや、ワニのように尻尾を使って器用に泳いでいた。それはもう、滑るような見事な泳ぎである。

しかも一人遊びをしているのではなく、何かが傍らにいてはしゃいでいる様子だった。見えはしないが、確かに誰かがいるようである。

「探してない。いいか、探・して・ない！」

リズはそんなことは聞いてないと、不愉快そうに眉間に皺を寄せた。むすつとした声だ。そんな彼女にグレンは言った。

「ああしてただドラゴンと遊んでいるように見えますが、猊下殿はいろいろなことを考

えているようですな。この弓のことだけでなく、何かとワシを訪ねてくださることがあるのです」

グレンはちつとも悪びれない様子で、「クライス殿？」と彼に何かを促している。
「ついでと言ってはなんですが、こちらも猊下^{げいか}に。各地の領主、並びに皇帝によって発行された土地の借用許可書にございます。リズ殿が尻尾^{しっぽ}を振りながら猊下^{げいか}の犬になられた際の……失礼。つまり、火鼠^{ひねず}狩りの賞金の余りで、猊下^{げいか}は向こう百年、国土を借りられました。と言っても誰も使わず、道さえも存在しない利用価値皆無の土地をまばらにという具合でございますが」

執事に扮するクライスは、仕事のみなら完璧だが、幾度も下世話で笑えない冗談をかわしました前科がある。風見とは違った意味の変態を前に、リズの視線は冷たかった。

「変態執事。次はその眼鏡をかち割る。人質に取るからよこせ」

「これだけはご容赦^{ようしやう}を。大切なもの故^{ゆえ}」

割られないうちに、と眼鏡を畳んで胸ポケットにしまったクライスは、深々と頭を下げてきた。

さすがにその後頭部に向かって何かをする気にはなれず、リズは怒りを向ける先を失ってしまふ。結局のところ、頼まれた弓と許可書を乱暴にひたたくて退室することしか、彼女にはできなかった。

その背中を見届けたグレンはぼつりと呟^{つぶや}く。

「やはり、お変わりになりましたな」

「何かおっしゃられましたか？」

「いえ、何も。さて、再開ですな。正直なところ、人を死地へ送り出す仕事と違って、この事務処理はいい。猊下^{げいか}のおこないで変わるものを一番よく知ることができる。こんなに楽しい仕事はありませんな」

「ええ、まことに。ああしていいじつても、怒りは全て猊下^{げいか}にしか向かいませんので」

「……」

「失礼。悪意はありません」

グレンは改めてクライスを見つめる。

彼の眼鏡が割られる日は、そう遠くないだろう。

十

のそりのそりと湖から上がるタマと一緒に水から出た風見は、手頃な場所に座り込んだ。
んだ。

「ふうむ、なるほど。データ的には出揃ったけど、やっぱりこうなるか」

びしょびしょに濡れた服を絞った彼は、胡坐あぐらをかくと革製の防水ポーチからメモ帳を取り出した。それを開くと何事かを書き足したり、腕を組んで唸うなったりと何やら思案している。

これは風見が日記のようにつけている手記である。

その中には彼が異世界に来てから用いた知識や、作った道具、出会った生物の分析などが辞書のごとき文量で記されている。一冊にも満たないそれは、この世界の人間にとっては金銀財宝などとは比べ物にならないほど、価値があるものに違いない。

その中に新しく記された項目は『アースドラゴン』。隣であくびをしているタマのこただ。

このところ、風見はタマと一緒に散歩をしたり、泳いだり、じゃれてみたりとできる限りの方法で触れ合ってきた。途中、事故死しかけたことは多々あったけれど、おかげで、どんな生物かも見えてきた。

結論から言えば、アースドラゴンはまともな生物ではない。

まず体を構成する筋肉の質からして風見の知る動物と全く異なる。

ドラゴン——というより、ヒュドラも含めた竜種の筋肉は強靱きょうじんな上に軽いのが特徴のようだ。それもSFに出てくる巨大ロボの駆動系を支える人工筋肉のように桁違けたちがひいの性能がある。

聞くとところによると、人工筋肉とは空気よりわずかに重い程度なのに反応がとても速く、さらには生体筋肉の数十倍の力が出せるのだという。竜種の筋肉とはまさにそういうレベルだ。

表皮を覆おおう鱗うろこにしても同様である。どんな武器も弾くと言われるほどの強度がありながら非常ゆえに軽い。

それ故に、タマはこんなに重そうな体でも、平然と泳ぐことができる。

さらに一度走り出せば時速百キロ超にもなるのだから、地上最強の生物という謳うたい文句も納得であった。どんな地形でも百キロ超で走破し、スタミナも無尽蔵の巨大生物だ。まともに渡り合おうと考える方が馬鹿げている。

そんな桁違けたちがひいの生物と、どんな宝よりも価値のある知識。

マレビット様、猊下げいかとちやほやされても、実際風見には手札がこれだけしかない。レベルを上げ、装備を揃えればどうにかなるわけでもない。深く考えなければファンタジー世界とは戦っていけないのだ。

「とりあえず、売れる物は用意した。その製造と販売をどこかに依頼するとして、不利な条件を吞まされないようにするためのカードが必要だ。問題は俺に用意できるカードがこの世界で通用するかどうかだけだ」

メモ帳を覗のぞき込んだまま悩み続ける風見は、そのまま地面に頭がつくのではないかと

いうほど、前のめりになっていた。

その動きに興味を引かれたのか、横でお座りしながら風見をじっと観察していたタマは、その動きを真似しはじめた。

最初はいい。彼と同じようにゆっくり、ゆっくりと前傾姿勢になり、綺麗に真似ていた。しかしながら、この先が胡坐とお座りでは大きく違う。斜め四十五度を超えたところでタマはバランスを崩し、べたんと倒れ込んでしまった。

そうして腹這いになると、今度は前足だけを器用に使って匍匐前進を始める。

観察してわかったことの一つだが、どうもこれは鱗の手入れらしい。いくら頑強な鱗でも、岩が苔むしてしまうように細かな傷にゴミが入る。この行為はそれに砂やすりをかけているようなもので、たとえるなら犬や猫における毛繕いだ。

タマが匍匐前進に満足した頃、風見の考えはようやくまとまった。

「しかしまあ、今はこれが精一杯か。土地は確保できたはずだし、山だって崩せるタマの力もある。命にとって血管は重要なものだし、大動脈が状況を左右するのはどれも一緒だよな」

考え込んでいた風見は、空を仰ぎ見てそう結論付ける。

何かを始める時、彼はまずこちらと日本を思い比べることにしている。

日常生活や旅路で、ああこれが日本だったら……と思う事柄を、自分の持っている手

札でどう再現できるかを考えるのだ。その中で費用対効果が高そうなものから実行していくのが、彼の基本方針である。

もつとも、そんな小難しいことはタマには関係ないらしい。空を見る風見を真似して、今度は背中から転がった。のぺっと仰向けに伸びたタマはそのまま体をくねらせ、背中の鱗のやすりがけに入る。

名前のとおり、陽だまりでくつろぐ猫のようなことをするタマだが、その巨大さ故に影響は甚大だ。地面は掘削されていくし、砂埃が風見を隠してしまうほどの高さで舞い上がる。

これではメモ帳と睨めっこもできない。

「……こりゃあ仕方ないな。ま、今日は十分遊んだし、俺は風邪を引かないうちに帰るかな」

水遊びをした後のタマは大概、日向ぼっこをして過ごす。

ざらざらとした舌で毛繕いならぬ鱗繕いをしはじめ、次第にむにやむにやと寝こけてきたタマの頭を撫でた風見は、ハイドラへの道を戻った。

こんな外で護衛が一人もない状況は認められていないのだが、街の入り口を仕切る門には必ず警備の隷属騎士がいるため、彼らが同行してくれる。

「ああ、今日はそんな感じですか。この時季だと風邪を引いてしまいますよ?」

濡れネズミと化した風見を見た隷属騎士たちはそう言うてくすくすと笑う。タマと遊ぶたびに砂まみれになったり、葉っぱまみれになったりと日ごとに全く違う姿になる風見は、隷属騎士と顔を合わせるたびに話のネタにされていた。滞在日数が長くなりようやく打ち解けてきたのか、彼らとの何気ない会話が増えてきている。

——もつとも、一部の例外も未だにいるのだが。顔を見ただけで、ふーっ！と野良猫のように威嚇し、どこかに行ってしまうあの子との関係改善は今後の課題だ。

城に着くと風見の同行者はメイドに交代した。彼女らも風見の格好を見るなりくすりと笑い、着替えを取りに走ってくれる。その間にと、タオルを手にした数人が近寄ってきた。

彼女らは顔や腕など作業を分担して拭きながら話しかけてくる。その内容は先ほど、手を振って別れた隷属騎士のことだ。

「狎下のお人柄には学ぶことが多いですね。あなた様はメイドにも、隷属騎士にも分けて隔てなく接してくださいます。隷属騎士たちが笑って話す様を見ると、今更ながらに彼らも人だったのだなと認識を改めさせられてしまうのです。恥ずかしながら、わたくしどもは領主様以上の地位の方が、そのようなことをされるとは思ってもみませんでした」
今までの態度を反省するようにメイドは語っていた。

そういえば最近、使用人と隷属騎士が話しているのをよく見かける。それは当たり前
の光景だろうと風見は思っていたのだが、彼女によるとついこの頃かららしい。

「そんな難しいことかなあ？俺は知らないことが多いから話をしてるだけだよ。俺の普通を実行すると常識から外れて笑われることもあるし、最悪、不審者扱いされるからな。俺にとっちゃ死活問題だ……」

「まあ。それならばお勉強の際にはぜひお呼びください。いくらでも一緒にいられますわ」
ふふと一人のメイドが慎ましくやかに笑う。こうして濡れネズミになっている時点で風見はすでにやらかしているのだが、それを指摘しないのは彼女の優しさだ。

と、その一方で風見の腕をタオルで拭いていたもう一人のメイドは手を止めた。彼女は俯きがちになると、わなわなと震える拳を握りしめる。

「それに比べ、狎下と一緒に来られたあの人はなんなのでございましょうか……！」
そのメイドは、きい！とハンカチでも噛み締めそうな顔だ。

はて、一体誰のことかと風見は首を傾げながら問いかける。
するとメイドは、慌てて表情を戻そうとした。が、こめかみにまだ少し血管が浮いたままである。

「実は、狎下のお供のクライス様は、わたくしどもの仕事まで手伝ってくださいなのです。しかもそのお働きが完璧すぎるほど完璧で……」

「え、それが何か問題なのか？」

ぷりぷりと怒っていてもかわいらしいメイドさんだ。どうもその抗議が切実には見えず、風見はよそ者が幅を利かしているのが嫌なのかなあと思う。

「ありまくりですとも！ 彼は茶菓子の準備から掃除まで全て一人でこなしてしまうのです。それも完璧に。これでは私たちの立つ瀬がありません。その上、バ、バストのサイズアップ法まで数種類教えられる始末……！ そんなもの……そんなもの、詰め物をすればですね……！」

「私は、雑巾の搾り汁を混ぜても悟られないお茶の淹れ方を教えていただきました」

「なるほど。何やってるんだ、このやろうって今度言っとく」

ぐぬぬと屈辱に耐えるように拳を握るメイドを見るに、あの変態執事がここでロクなことをしていないのは風見にもよくわかった。彼の前科は挙げればキリがない。

しかし、その一方で働きが完璧すぎるから断りづらいのだ。彼女らの言い分に深く頷く。「仕事ならいざ知らず、胸のことまで！ ただの執事でしたら縄で縛って湖に浮かべたものをっ」

胸について触れられたのがよほど腹立たしかったのか、胸の控えめな方のメイドは、くつと顔を背けて地団太を踏んでいる。

もう一人のメイドが同じことをしていたら、たゆんたゆんと揺れていただろうが、こ

ちらは全く揺れない。こうした格差が余計にコンプレックスを生むのだろう。

「なるほど。まあ、よほど困ったことがあれば俺も力になるよ。なんでも気軽に言ってくれ」

こんな風に何気なくしているが、実はメイドがくれる情報はとても重要だったりする。まず、領内のお偉方の会合はほぼ決まってこの城でおこなわれる。

そのお偉方をもてなすのが彼女らの仕事であり、書類を置いた部屋を掃除するのも彼女らだ。見聞きしたことは決して口外しないこと、ときつく教えられている彼女らでも、風見は身内であるし、ドニも一目置く相手なのでこっそり話してくれるのである。

そんな彼女らからもたらされる情報と、隷属騎士が持つ情報を合わせるとかなり確かなことがわかる。

曖昧な点はドニに確認することもできるので、風見はラヴァン領内での政治的な動きを半日程度の遅れで知ることができる。タマと遊んで全身濡れネズミになっている彼が、実は領内の情勢を誰より掴んでいるとは誰も予想しないだろう。

「では、猥下。早速で恐縮でございますが、一つお伺いします」

「ん、何かあるのか？」

目を向けてみれば胸の控えめな方のメイドは自分の胸をぺたぺたと触っていた。

……なるほど。内容はすでに読めてしまった感じである。

「猥下の世界でのバストアップ法はいかなものなのでしょう!」

「やっぱりそこか……!」

「そこでございますが何かっ!」

「あ、いや、なんでもない……」

どうも彼女にとっては、クライスのことより切実な問題らしい。

涙目でずずいと詰め寄せられた上に、ぺたぺた音が真に迫る。服の上から見るとクイナの間くらいであり、それなりに需要もありそうなのだが彼女の目は本気だ。下手に答えようものなら変態執事の代わりに縄で縛られて湖にポイされそうである。

正直、これ以上の湖は凍えるので勘弁願いたいところだ。

「あー、豆……かな? 豆の栄養には体がそういう発育をするために出すホルモンと似た物質が含まれるらしいから」

「マメ……。必勝の策は豆でございますね! あの眼鏡執事に目にも物を見せてくれますっ」

「が、頑張れ」

「豆を持てえ! と叫びそうなほど燃え上がっているメイドさんは大層な気迫だ。風見は気圧され、思わず引いてしまう。」

と、その時。彼の背後からコツコツと靴音が聞こえてきた。

この規則正しく、慎ましい音は――

「風見様、お戻りになられたのですね。湖に行かれていたということは、お風呂が必要ですよ。沸かししておきましたので、お召し替えの前に入られてはいかがですか?」

やって来たのはやはりクロエだ。ハドリア教の神官である彼女の、よくできた嫁のよくな用意のよさはさすがである。

「せっかくだけど、どうせ汚れるから今はタオルと着替えで十分だ。ちょうどよかった。実はクロエを探そうと思っていたところだったんだ」

「何か私に御用が?」

「ああ。まあ、その……なんだ。ちょっと手伝ってほしいんだけど内容をここで言うのは憚られるし、他に用がなければついてきてもらってもいいか?」

「はい。私ならいつでも大丈夫です」

クロエは笑顔で頷く。

「ありがとう。これができれば百年単位の進歩なんだ。――というわけでひとまずは森へカビを採りに行こうっ!」

「……………はい?」

最後にぼろっと出た、妙な言葉。

予想の斜め上を行く風見に、クロエはメイドと一緒に目点にするのだった。

風見とクロエが謎の行動に走っている間、リズはといえば二時間ほどかけてハイドラの街をぐるりと回り、ようやく城へ戻ってきたところだった。

「はあ。こんな面倒、やるんじゃないか」

「はやく彼女は雑貨が入った紙袋を腕に抱え、大きく膨らんだ革のサックを背負っている。」

これは竜の巣に向かう旅の準備である。今までよりずっと長い旅となるのは確実で、風見の弓だけではなく、外套やサック、食料、携行用の調理器具も調達する必要がある。風見やクロエはこういう当たり前のことにはとんと疎い^{なま}ため、いざ旅に出てから困るのは目に見えていたのだ。できれば忘れていた彼女としては、こうしてメモを手^{なま}に主婦じみた買い物をしている今の自分に、何をやってんだかため息が出てしまう。

もっとも風見に会いたくないから、ちようどよかったというのもあるが。

そのついでと言ってはなんだが、彼女は隷属騎士の様子も見て回っていた。事務仕事ができない分、せめて自分の目と足で組織の状態を再確認していたのだ。

見回った限りでは仕事に支障が生じている場所はなく、トップがすげ代わった動揺はほぼ見られなかった。忌々しい限りだが、これも風見の影響の一つなのだろう。

彼は隷属騎士が食事や休憩といった最低限のことを確保できるよう、ドニに進言していた。また、騎士団の衛生兵には治療の基礎から手解きをしたので、彼らの生活環境は明らかに改善されていた。

——と、つい彼を思い出してしまったリズはしかめっ面となる。いない時まで頭に出てくるなど風見に呪いの念を送った。

その時、たたたとこちらに駆けてくる音が聞こえた。敏感に反応した耳はぴんと立ち、アンテナのように音源に向く。

「リズおねーさまあー！」

「つとと。なんだ、やつぱりセラか」

横から何かが飛んできたと思ったら隷属騎士のセラである。

リズが、首にぶら下がるセラを剥がそうとすると、ぎゅっと抱きついて離れない。しかもちようどリズの胸に埋まっている顔をうりうりと擦りつけてくるので、非常にくすぐったかった。

「いきなりどうした？」

「どーしたもこーしたもないですよ。お姉様が旅の準備をされているというのに、セ

ラにはちっともお声がかからないなあと思ひまして。戦場がそこにあるなら、お姉様とセラは一心同体。相性抜群のセラが呼ばれないはずはないですよね? ねっ?」
同じ地属性である彼女らは前線よく行動を共にしていた。同じ属性の律法は重なることにより、威力の増加、効果の複雑化を起こせるからである。

小柄で体術も劣るセラがリズと並んで前線に立てるのも、そんな理由があればこそだ。お姉様と呼び慕うのも、リズに何度となく命を守られたためである。

そんなリズと離ればなれは悲しいし、心細いと幼い瞳をうるうるとさせて訴えてきた。「残念だが無理だよ。この旅に先立ってシンゴの警備のためにすることがある。セラはそっちに行くともう決まってるしね」

「なあっ!? あの男のせいでセラはお姉様と引き離されるのですかあ!？」

「そうなるね」

ひっそり「お姉様はセラのものなのに」と風見への怨嗟をたぎらせた彼女だが、リズの視線が注がれていることに気付き、にぼっと明るい表情を向ける。

セラのこういう裏表のある性格は仲間内でもよく知られていた。以前も、リズが若い騎士をちよつとからかっただけで嫉妬して、飛び蹴りをかましにいったくらいだ。

「だからあの男のための使い走りなんて嫌だったのにい。はあ、黙って帰りたい……。あんな男、勝手に困ればいいのです。お姉様がお手つきにされる前にもげてしまえ。い

え、いつそセラがもぎに……」

「使い走り? シンゴが私に何か用がある?」

「まあ、あるにはあるのですけれど」

むすーっとふくれっ面のセラは拗ねたまま、なかなか言おうとしない。そんな彼女の顔にリズはじつと視線を注ぐ。

しばらくするとセラはその視線に耐えられなくなり、しぶしぶと口を開いた。

「クロエさんが倒れたとか聞きました。とりあえずお姉様を探して伝えてこいって言われただけだから、詳しくは知らないですけど」

「場所?」

「あの男の部屋です」

あのクロエが倒れた……? とリズは怪訝な顔をする。

狎下の付き人という立場上、クロエは戦闘のみならずあらゆる面で鍛えられたハドリア教の選りすぐりだ。それが倒れるなんて並大抵のことではない。

急を要することではなさそうだが、放っておいてよいことでもなさそうだ。まったく、仕方がないと息をついたリズは持っていた荷物をセラに預ける。

「セラ、それは任せた」

「あつ。ちょ、お姉様っ!」

小柄なセラではよろける量だったが、リズは気にせず、疾風の^{はやて}ように駆けて城に戻った。階段の手すりを跳び越え、一気に階段を駆け上がり三階へ。彼女は話を聞いてから一分と経たずに風見の部屋の扉を開ける。

確かにそこでは事件が起こっていた。

知らせのとおり、クロエはくたんと力なく倒れている。しかし外傷はなく、周りを見回すと部屋にも異常がない。侵入者でもあれば風見が連れ歩くグリカグラが律法をぶっ放していたはずだが、その二匹も乱入したリズに驚いて毛を逆立てているのみである。では、ここで一体何があったのだろうか？

「リ、リズ……」

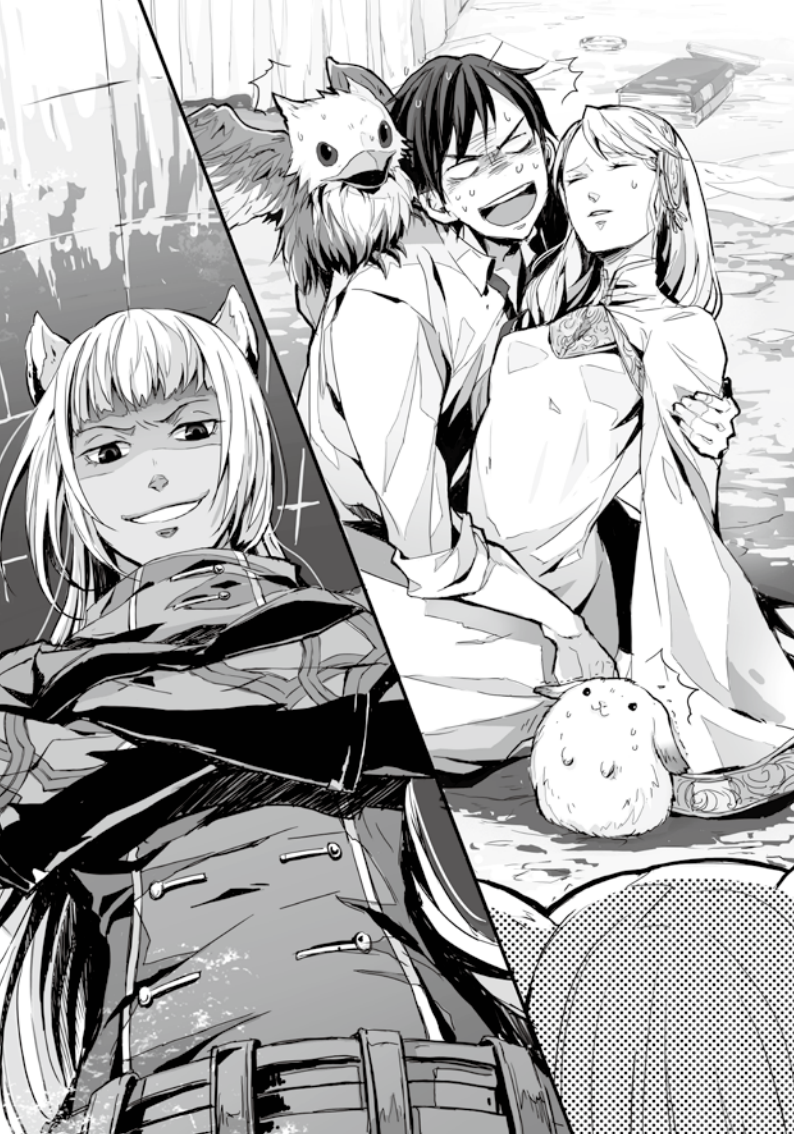
風見は意識を失ったクロエを抱え、おろおろしている。原因は彼が語ってくれるだろう。「説明しろ、シンゴ。何があった？」

「……」

簡潔な問い。風見は口を開こうとして、もごもごと答え辛そうに視線を逸らす。しかし黙っていられても埒が明かない。リズは語気を強めてさらに促した。

「誰かに襲われたんではないのはわかる。ただね、その白服が^{しんぷく}気絶すること自体、相当なことだよ。私にはそれを聞いておく義務がある。言いくくても話してもらってからね」

「いや、これはだな……」



「は・な・せ」

「はい……」

はつきりとしないう風に言葉突きつけたリズは、ずかずかと歩み寄ると目の前で腕を組んで見下ろした。下から見上げる彼には大きく見えたことだろう。後ろめたいことでもあるのか、捕獲されたイタズラ妖精のように脂汗あせを流している。

結局のところ、彼が事情を全て語るまで十分ほど時間を費やした。

「——で、こんな有り様ありさまだと？」

「そうなる。いや、そのですね、実験は途中でやめられないというか……」

リズは目の前で正座する風見を相変わず腕組みしたまま見下ろしていた。

未だかつてこれほど冷たく相手を見つめたことがあっただろうか。それに晒さらされた風見はぶるぶると震えている。

「はあ……」

またしてもこいつは、とリズは呆れてため息を吐く。ちらと目をやると、部屋にはいくつも机が並べられており、その上には数えきれないほどのシャーレが置いてあった。

シャーレの中には透明な膜のようなものがかかっているものと、カビのようなものが生えたものの二種類がある。彼はクロエと一緒に、何かの実験をおこなっていたのだそう。

曰いわく、クロエの律法の力を借りて細胞培養や真菌培養しんきんからインスリンや抗生物質を作ろうとしたらしいが、リズはよく知らない。内容なんてどうでもいいことだ。

とにかく、その実験に取りかかってから数時間が経過しているらしい。要するに、この状況はやりすぎが原因なのだった。

「シンゴ、お前はバカだろう？ 律法は精神力を使う。それを限度も考えずに酷使させればクロエだつてぶっ倒れるに決まってる。ただ倒れるだけならまだしも、酷ければ脳が焼き切れることだつてあるんだよ？ あれは元からネジが吹っ飛んでいるんだから、シンゴが止めなければ止まるはずがないだろうが」

「ごもつともです……」

風見は項垂くたれ、深々と反省の態度を示す。これでもかと持ち込んだ机に数十と並ぶシャーレを見れば風見の責任は明白だった。

言い訳を聞くと、培養とは早くても数日、遅ければ数ヶ月かかるものだそうだと。ところが、クロエの律法を使うと、ものの数分でできてしまう。実験効率は数倍どころか数百倍と言ってもまだ足りないくらいである。これに興奮しない方が科学者としてはおかしいのだ。

そして感動のまま彼は、次はコレ次はコレと頼み、クロエは疲労を隠して応え続けて——気付けばこうなっていた。

彼女が倒れてようやく冷静になった風見は、とりあえずリズを探すようにと警備の騎士を走らせ、こうして現在リズに叱られているのである。

正座する風見の目線に合わせて屈んだリズがじとーつと睨むと、苦しうに目を逸らされた。地味にイラッとした彼女は彼の顔を掴み、ぐきりと戻させて睨みつける。

「これ以上は叱る言葉もないね。とりあえずクロエはただの過労だよ。寝れば明日には回復する。……あまり心配しすぎなくてもいい」

「体に影響はないのか？」

「その前段階で落ちたんだ。心配はいらん」

「そっか、よかった。焦ったのは俺の早とちりだったか」

「まったく……」

リズは心配して損しただとか、紛らわしいともう少し抗議の言葉をぶつけてやりたかった。

だが風見が胸を撫で下ろして安心している様を見ると、ぶつけられなくなってしまう、ぼやくことでしか消化できない。全くもって不完全燃焼である。

また溜まったストレスにカリカリしていたところ、風見が続けて声をかけてきた。

「なあ、ついでと言っただけで、このままクロエの看病も頼まれてくれないか？」

「責任をもって看病してやれと言いたいけど、命令なら従うさ。命令なら、ね」

「悪い。それでも実験を途中でダメにするより、クロエが頑張ってくれたことはちゃんと成果として残しておきたいんだ。そっちは任せたい」

「シンゴは薄情だったって伝えておくよ。後で機嫌取りに困っても知らんからね」

「そうだな。その時は精一杯お返しをする」

リズは風見の言葉を聞くとぶいと後ろを向き、クロエを寝かしているベッドの縁に腰かけた。

久々にまじったなあど風見は反省する。

だが、やってしまったものは仕方がない。風見は、クロエの頑張りを無駄にしないために、無数のシャーレと向き合う。

この研究を進めることは勇者が聖剣を手に入れるのと、ある意味、同義だ。

この先、抗生物質とインスリンは風見にとって強力な武器になる。例えば、人々の死因の多くを占める肺炎や結核などの感染症を治せる抗生物質の価値は言うまでもないだろう。では、インスリンはどうだろうか？

そもそもこれは飽食の象徴である糖尿病に対する薬であり、この世界には無縁のように思える。

だが、実際は、こちらでは貴族をはじめとした権力者が世界を牛耳っており、農民は

貧しくとも上流階級の人々は政務活動に伴って日夜催されるパーティで、吐くほど飲み食いしている。つまり、この病を患う人は少なくないのだ。

それを治せる薬を持っているということは、風見がこれから事をなす上で、大きな意味を持つてくるはずだ。

ただ、それ故に不安になることがある。

「なあ、リズ。俺が失敗しそうなときはまた注意してくれるか？」

「今更だね。そうやって支えろとシンゴが言ったんだろう？ 手は抜かんよ」

振り返ると、いいから集中しろと言いたげな視線でちくちくと刺される。そんな頼もしいお目付け役に安心して、そうだなと頷いた風見はデータのまとめを開始した。

今日おこなった真菌培養や細胞培養にはまだまだ課題が多いものの、それほど難しい技術が必要なわけではない。中世ヨーロッパ並みの文明しかない異世界でも十分に再現可能な技術だ。

真菌培養は目的のカビを増やせばいいだけなので、寒天やゼラチン、ブイヨンから培地を作って菌を塗れば勝手に増えてくれる。難しいのは細胞培養の方だ。

極論すれば細胞は体内と同じ濃度の塩水に浸し、体内に近い温度環境に置けば増える。タンパク質分解酵素を使って細胞を個々に分けたり、雑菌の繁殖を防ぐための抗生物質を混ぜたり、細胞に最適の条件を整えるための酸素や二酸化炭素濃度を調整した

り——といった小難しい操作もあるが、それは能率を高めるためのおまけである。

もちろん、ともに増やすなら培養液にはアミノ酸やリン酸といった栄養が欠かせない。生物は塩水だけでは生きられないが、ご飯さえ充実していればある程度は環境に適応できるのと同じだ。

風見が最も苦心したのはこの点だったのだが、血液を分離させて作った血清を培養液代わりにしたことで、その問題はなんとか解決できた。

細胞培養の初期には、こういった動物の血清や羊水が培養液として使われていたらしい。体内の環境を再現するために、体内から素材を持つてくるというのは考えてみれば至極当然だろう。

そうして成功したデータをまとめ終えた風見は、次に有用な物質の採取とその効能の確認を繰り返し、さらなるデータを取るのだった。

十

(にしても、視線を感じるな)

あれから二時間ほど作業を続けて、外はもう夜だった。けれどその間中、背に感じるリズの視線が途切れない。普段の彼女ならとくに興味を失ってベッドで寝転がるとこ

ろだが、今日は何故かよそ見をすることもなく視線を注いできていた。

それが奇妙であり、気まずくもある。風見がたまに視線を向けると、彼女は目を逸らすことなく見つめてくるのだ。まだ何か言いたいことがあるのではないかと勘繰ってしまふ。

「……えっとリズ、どうした?」

「どうもしないさ。お前は私の飼い主だろう。それを見つめて何がおかしい?」

「でもほら、暇だろ。クロエを連れて自分の寢床に戻ってもいいんだぞ?」

「あのね、シンゴは私を買ったんだろう? 私はお前の所有物なんだから、もう兵舎に寢床はないし、客人として用意されるわけもないだろうが。私にはここ以外に戻る場所なんてないよ」

「うあつ、言われてみれば。だからお前、ここ数日俺のベッドを占領してたのか!」

「だってシンゴはベッドで寝ないしね。もったいないよ」

「いや、女の子がすやすやしているところに入り込める独身男性の方がレアだからな!」

「ヘタレめ」

「ヘタレ言うなっ!」

風見がソファで寝かされていた日々はともかく、道理でここから動かないわけだ。

しかし今から部屋を融通してもらおうとしても、ドニが快諾するとは思えない。リズに関するのを彼に頼るのは得策ではなかった。

かといって、まさか塔に隔離された時のように、このまま彼女と相部屋でいるわけにはいかなかった。そんなことをすれば、クロエまで張り合って「私もここで寝ます!」と同衾宣言しかなない。

さすがの風見も、女の子二人と相部屋をして不埒なことをしてかさない自信はなかった。

「うーん。それならとりあえずクロエの部屋に行ったらどうだ?」

「邪魔だ、どこかに行けと命令するなら従うよ」

「いや、そういうわけじゃないから。ほんとお前は命令好きだな」
いつもながらとげとげしい言葉には和やかにツツコミをしておく。

「言ったらう、明確なんだ。私にはそれがわかりやすくて助かる」

その気がないと何度言ってもこれなのだ。困った子だと見やっていると「見るなっ」とふてぶてしく吠えられた。

「それよりシンゴは仕事があるんだろう? 無駄口を叩くな」

「それはたった今終わったとこだ。だからもういいんだよ」

「ふーん。それでクロエの頑張りやらはどうなった?」

リズは偉そうに足を組んで聞いてくる。

クロエが倒れてしまった以上、風見を見守るのは彼女だけである。もしかしたら彼女は付き合いた下手なだけで、風見を一人にしないためにじっと見ていたのかも知れなかった。

そういう風に考えれば一割増しで可愛く見える。

「抗生物質とインスリン作りの足掛かりができたって感じかな。あと、その過程でわかったんだけど、俺とリズたちの違いもなんとなく見当がついた」

「そんなものあるのかね。異世界人なんて言われても私には同じに見えるけど」

「そりゃあるだろ。俺の世界には魔法使いないし、ヒュドラの律法が俺だけ追尾しなかっただとか、ヒュドラの体液が効かなかっただとか、どこかしらに違う部分はあるって考えるのが自然だ」

人と亜人という差はあっても、体の構造や脈拍数など生物としての基本は似たり寄ったりだ。にもかかわらず、風見とリズらでは明らかに何かが違うのだ。

言われてみて気付いたリズは「それで何が違う?」と続けて問いかけてくる。

「まずな、俺の細胞単体にはクロエの律法が効かなかったんだよ」

「……? 塔で傷を治した時には効いていたじゃないか」

「そうだ。でも、タマの件でリズに殴られた時は効かなかった。じゃあ、治った時と治

らなかった時の違いってなんだろうって考えたんだ」

理由が気になるだろう? と風見は視線で問いかける。

「まあ、俺的にはすぐーく言いにくいんだけどな、傷をべろべろされてた点だけなんだよ。タマの時も結局、それで効いたしな」

「なるほど。そう言ってまたやらせる気か。やれやれ、私たちはそうやってシンゴに調教されていくんだね。来年あたりはみんな揃って首輪付きかな」

「変なことを言うなっ!」

リズは男なんてケダモノだ、と言いたげな白い目でおちよくってくる。そんな気があつたら、もうぐうの音も出ないほど命令されているだろうに、こんなところにだけ触れないのが彼女のズルいところだ。

「ともかくだな、俺とリズたちの違いはそこにあつたんだ。試しに培養した俺の細胞にクロエの唾液とか血を混ぜたら律法に反応したし間違いない。律法は血を媒介にして威力を高めたりするけど、あれはきつと血には律法の源たる何かが多く含まれているからなんだろうな」

「そうだろうね。血が媒介になるなら他でもいけるかと試した例はあるらしいよ。あとは死んだ人間に対して、いつまで律法の効果が反映されるかとかね。死体でもしばらくは傷が癒えるらしい。というかそもそも、そうでもなければ流した血液が媒体になるわ

けがないだろうしね」

リズはそういう研究には興味がないものの、戦闘に影響がある部分は実体験として覚えていようだ。

「なるほどな。リズたちの血肉に存在するその何かは、死んだり体外に出されると使えなくなっていくわけか。まさに特殊能力を発生させる細胞とか細胞小器官って感じだな」

例えばクロエの陽属性であればそれが指令を発し、動植物の細胞を活性化させる。

リズのような地属性や、クライスのような氷属性であれば外部に作用し、自然現象が発生する。

律法で何かに狙いをつけるというのも、その源が相互作用することによって確定するのだろう。自動追尾するはずのヒュドラの律法が風見を狙えなかったのも、そう考えれば納得できる。

アクションゲームで人物はロックオンできても背景はロックオンできないのと同じだ。風見はそういう仕組みの埒外にいるから狙えないし、癒しも効かないのだろう。

確証はないが魔物に嫌われないのも、ヒュドラの体液が無効だったのも、きっとこの辺りに関係があるのだと風見は予想していた。

リズはそういう理屈に興味はないのだろうが、風見の講釈が終わるまでは静かに耳を傾けていた。

立ち読みサンプルはここまで

「ふむ。それで終わりかな？」

「ああ。これが今のところ想像できた全部だ。わかったか？」

「いや全然。私は興味もないし、クロエみたいに理解できるほど頭もよくないからね」人が頑張って説明したというのに、リズはさらりとスバラシイ笑顔をくれた。

そして彼女はくたびれた様子で「ようやく仕事が終わったか」と立ち上がる。そして、剣が入るほどの大きさの木箱を持ち出してきた。

「グレンからだ。注文の品ができあがったそうだよ。あと変態執事から土地の利用承諾書とやらも預かった」

「もしかしてリズはこれを渡すために待ってたのか？」

「主の仕事を邪魔するのは許されてないからね」

「そんなこと気にするなよ。普通の友達とか家族みたいな扱いでいい。何か用とかお願いがあるなら、いつでも声をかけること。いいな？」

「それは——」

「命令じゃない、約束だ。気楽に言ってくればいい」

「またそんなことを言って」

リズはさも馬鹿馬鹿しそうに鼻で笑う——かと思われたのだが「やくそく、か」と小さな声で繰り返していた。